

小学校国語教育に求められる「伝統的な言語文化」としての児童文学
 —教科書に掲載された「いなばの白うさぎ」を一例として—

市瀬雅之

はじめに

二〇〇八年の『小学校学習指導要領(平成二十年告示) 国語編』に、「伝統的な言語文化」に関する学習が重視された。二〇一七年(平成二十九年三月)の同改訂においても、「我が国の言語文化」の中に継承されている。教科書出版社はこれに応えて、二年生の国語教科書に日本神話を掲載する。とはいえ教材の内容は、出版社毎に異なるので、特徴の整理が必要となる¹⁾。それぞれに特性を活かした授業展開が求められよう。本稿は光村図書出版『こくご二上たんぽぽ』に、児童文学作家である中川李枝子²⁾が書き下ろした「いなばの白うさぎ」(本稿では、以下「教科書教材」と記す)に着目する。

当該の教科書教材に典拠を求めると、『古事記』が想起される³⁾。しかし、古典作品の読解は、中学校の国語教育にはじまる。小学校の国語教育では、教材が再話であることが重視されよう。

日本神話の再話に目を向けてみると、江戸時代の国学の隆盛を受けて、明治時代にチェンバレンの「ちりめん本」や巖谷小波の『日本昔噺』叢書が想起される⁴⁾。はじめての本格的な児童文学雑誌となる「赤い鳥」には、鈴木三重吉が『古事記物語』を連載した。国定教科書による教育の影響から、戦後十年は遠ざけられる時期もあったが、世界の物語を読む中に、日本神話も見直されてゆく⁵⁾。今日でも、児童文学の中に再話が展開されており、当該の教科書教材もその一例に数えられる。「神話」の学習が、特に低学年の教科書に教材化されていることに鑑みると、学習指導要領が求める「伝統的な言語文化」の学習は、古典作品と結び

つけられる前に、児童文学作品との関わりが留意される。

本稿は、教科書教材として再話された神話と、指導書が参考に掲げる絵本を読み解き、比較するところから得られる「伝統的な言語文化」への学習の可能性について述べる。

一、学習指導要領と光村図書出版の「いなばの白うさぎ」

当該の教科書教材の検討に入る前に、『小学校学習指導要領(平成二十九年告示) 国語編』(三月 文部科学省)に改訂された「伝統的な言語文化」の学習内容を確認しておく。

同『解説』(平成二十九年七月 文部科学省)を開くと、第1章「総説」2「国語科の改訂の趣旨及び要点」の④「我が国の言語文化に関する指導の改善・充実」には、

中央教育審議会答申においては、「引き続き、我が国の言語文化に親しみ、愛情を持って享受し、その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成するため、伝統文化に関する学習を重視することが必要である。」とされている。

これを踏まえ、「伝統的な言語文化」、「言葉の由来や変化」、「書写」、「読書」に関する指導事項を「我が国の言語文化に関する事項」として整理するとともに、第1学年及び第2学年の新しい内容として、言葉の豊かさに関する指導事項を追加するなど、その内容の改善を図った。

とある。ここにいる「言語文化」とは、第2章「国語科の目標及び内容」第2節「国語科の内容」2「知識及び技能」の内容⁶⁾が、③「我が国の言語文化に関する事項」に、

我が国の言語文化とは、我が国の歴史の中で創造され、継承され

てきた文化的に価値をもつ言語そのもの、つまり文化としての言語、またそれらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを幅広く指している。今回の改訂では、これらに関わる「伝統的な言語文化」、「言葉の由来や変化」、「書写」、「読書」に関する内容を「我が国の言語文化に関する事項」として整理した。

とある。「我が国の歴史の中で創造され」た神話を『古事記』をはじめ『日本書紀』や『風土記』等に読み、その再話を「継承されてきた文化的に価値をもつ言語」として読むことができる。再話された児童文学作品は、「受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを幅広く指している」と記す中に含まれる「○伝統的な言語文化」の項目には、各学年毎に、我が国の言語文化に触れ、親しんだり、楽しんだりするとともに、その豊かさに気付く、理解を深めることに重点を置いて内容を構成している。

とする中に、各学年の「アは、音読するなどして言葉の響きやリズムに親しむことを系統的に示している。イは、第1学年及び第2学年では言葉の豊かさに気付くことを、第3学年及び第4学年ではことわざや慣用語、故事成語などの長い間使われてきた言葉を知り、使うことを、第5学年及び第6学年では作品に表れている昔の人のものを見方や感じ方を知ること示している。

とある。特に、第一学年及び第二学年の内容に留意すると、別表の「第1学年及び第2学年」の「伝統的な言語文化」に、ア昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞くなどして、我が国の伝統的な言語文化に親しむこと。

イ長く親しまれている言葉遊びを通して、言葉の豊かさに気付くこと。が求められている。アの内容は、第3章「各学年の内容」第1節「第1学年及び第2学年の内容」1「〔知識及び技能〕」の項目に、「児童が伝統的な言語文化としての古典に出会い、親しんでいく始まりとして、昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞くなどすること」が求められている。具体的には、

昔話や神話・伝承は、国の始まりや形成過程、人の生き方や自然などについての古代からの人々のもの見方や考え方が、長い歴史の中で口承だけでなく筆記された書物として、現在に引き継がれてきたものである。昔話は、「むかしむかし、あるところに」などの言葉で語り始められる空想的な物語であり、特定または不特定の人物について描かれる。

神話・伝承は、一般的には特定の人や場所、自然、出来事などと結び付けられ、伝説的に語られている物語である。古事記、日本書紀、風土記などに描かれたものや、地域に伝わる伝説などが教材として考えられる。その際、児童の発達の段階や初めて古典を学習することを考慮し、易しく書き換えたものを取り上げることが必要である。

と、「筆記された書物として、現在に引き継がれてきたもの」であり、「児童の発達の段階」に応じ、「易しく書き換えたもの」が求められている。加えて、

第1学年及び第2学年では、まず、読み聞かせを聞くことで、伝統的な言語文化に触れることの楽しさを実感できるようにすることが大切である。話の面白さに加え、独特の語り口調や言い回しなどにも気付く、親しみを感じていくことを重視する。また、地域が育

んできた言語文化に触れることも大切である。例えば、地域の人々による民話の語りを聞いたり劇を行ったりするなど、言語活動を工夫することなどが考えられる。

と、「読み聞かせ」や「民話の語りを聞いたり劇を行ったりすること等が、学習の方法として選ばれている。

こうした学習指導要領の内容を受けて、光村図書出版は、『こくご二上たんぼぼ』に、「ともだちを さがそう 話す・聞く」との目次下、「いなばの 白うさぎ」を準備している。本文は「聞いて たのしもう」と見出しを立て、伊藤秀男の挿絵三枚を見ながら、児童文学作家である中川李枝子が書き下ろした再話を聞く。読み聞かせる内容は、教科書の末尾に「ふるく」として、「がくしゅうを広げよう」の中に、活字として読むことができる。

神話を再話した児童文学作品が、「児童が伝統的な言語文化としての古典に出合い、親しんでいく始まり」としての役割を負う教材となり得ていることが確認される。

二、書き下ろされた「いなばの 白うさぎ」

当該の教科書教材に指導書は、生徒が知っている「昔話」や「神話」を尋ねることから、授業をはじめめることを求める。その中の一つとして、教科書の挿絵から「いなばの 白うさぎ」のあらすじを連想させる。「昔話」より古く、千三百年前の日本人が作ったものであることを伝えて、「神話」への関心を深めようとしている。

ここでは、その後に読み聞かせる「いなばの 白うさぎ」の内容を、「ふるく がくしゅうを広げよう」に収載された文章を用いて読み解いておく。

冒頭は、「むかし、むかし、大むかし。」にはじまる。神話と昔話を区別することより、親しみやすさが優先されている。学習指導要領の『解説』には、「神話」が「特定の人や場所、自然、出来事などと結び付けられ、伝説的に語られている物語」として読まれるべきことが記されていた。「特定の人」が「八十人ものかみさまの兄弟」であり、「かみさまのお話」神話と解することは難しくない。「場所」が「いずもの国」と「いなばの国」に限られていることで、地域の伝説として聞く(読む)ことが可能である。

生徒たちは、「八十人ものかみさまの兄弟」との表現から、「いずもの国」だけでも、日本には多くの神々の存在を想像することができる。「自分こそ、国をおさめるのにふさわしいと、たがいに力をきせい合う兄弟たちがいれば、争いを好まない「すえつ子のオオクニヌシ」だけが、「いくじなし」と笑われ、「こきつかわれる」とある。神が人間的に表現されているところに、大きな特徴が認められる。「兄さんたちは、きれいなおひめさまをおよめさんにもらおうと、いなばの国」へでかけるところに、「いなばの国」の「おひめさま」も、神であることが連想されよう。「いずもの国」の男神が、「いなばの国」の女神と結婚しようとするところに、話がはじまる。

兄たちがオオクニヌシノミコトに、旅の荷物を担がせるところには、「いくじなし」と、こき使う様子が表現されている。身軽な兄たちだけが先に行く。

「けたのみさき」は、「いなばの国」と同様に、話の舞台が地域に限られた話であることを示唆する。そこに倒れているうさぎが「赤はだか」であるとの言葉は、聞き慣れないので心に留められる。「毛をすつかりむしりとられて、ふるえています。」との表現が、その意味を痛々しく伝えている。そうした姿を見て「これは、おもしろいうさぎだ。からか

ってやるう。」と話す兄神たちには、これが神の言葉かと耳を疑い驚かされる。

「そのうさぎ、海に入っしお水をあび、つめたい風に当たるとよいぞ。」との言葉を、信じて疑わないうさぎは、よろこんで海に入る。ところが、「しお水は体中にしみて」風が皮膚を破いて、「あまりのいたさにうさぎが泣いている」様子には、大きく裏切られる結果が示される。兄神たちが信じられない存在として捉えられることで、後からやってくるオオクニヌシノミコトの「どうしたのかね。」との言葉が「やさしく」響いている。

テキストは、一行開けることで、ここまでが第一段として記されている。「いなばの国」の「きれいなおひめさま」に求婚する「いずもの国」の「八十人ものかみさまの兄弟」は、「赤はだか」のうさぎをからかう兄神たちと、「やさしく」声をかける「オオクニヌシ」とに大別される。続いて第二段を読んでみよう。

うさぎがオオクニヌシノミコトに、「赤はだか」となった経緯を語り始める。住んでいたところを「おきのしま」と記すのは、「けたのみさき」と同様に、限られた地域の話であることを伝える。海を渡りたかったが、泳げないので思案して、わいの背中を渡ることを思いついたという。「わに」には注が施され、「さめ」であることが記されている。地方によって、「さめ」が「わに」と呼ばれるのを知り、地域に限られた言語文化を体験することができる。

うさぎとわにのやりとりは、会話形式で生き生きと表現されている。中でもうさぎが、わにと数を比べる方法を「かんたんだよ」と答える部分には利発さが示され、これを「なるほど、うさぎさんはかしこい。」と返すわには、素朴で純粹な気持ちのありようが表されている。うさぎには、並んだわにの上を飛びながら、あと一歩で岸へ降りる時に、「う

れしくなって」ついだましましたことを「言ってしまったのです。」と、率直な心情も表されている。

そのとたん、おこったわにが、大きな口をあけて、かみつきました。あつというまに、毛はすっかりむしりとられ、わたしは赤はだかになつていました。

と、その報いを受けたことが記されている。話は、そこに、かみさまがおおぜい通りかかって、しお水をあびて風に当たるとよいと言われました。でも、よくなるどころか、いたくなるばかりで、とてもがまんができません。

と続けられているので、聞き手には、うさぎがわにを騙したことへの批判より、通りかかった神々の行為の方が残酷に感じられる。

こうした内容を受ける第三段には、オオクニヌシノミコトが「おお、かわいそうに」と、神々がうさぎにした仕打ちを、正す形で話が進められる。うさぎは「オオクニヌシ」に教えられたとおり、「きれいな水でしお水をていねいにあらいながす」と、「がまのほをあつめた上にねころがりました。」

すると、本当にまっ白い、ふわふわの毛の白うさぎにもどりました。と表現されるところに、作品名が想起される。

ただし、話は、それからというものの、「オオクニヌシこそ、八十人の兄弟の中でいちばんすぐれた方だ。」と、世につたわるようになりました。

と閉じられている。うさぎは主人公にならない。内容からすると、「いなばの白うさぎ」と題するより、「オオクニヌシ物語」とした方が相応しいように思われるが、後述するように、「いなばの白うさぎ」と題されることの意味は小さくない。

指導書には「作者の言葉」として、「大昔にあったこと」と題した作

者の神話体験が回想される。その終わりに、

二年生には二年生の読解力に応じて、登場人物の描写、背景の説明、事件の詳細をどう書くか工夫しました。一点の曇りもなく明快でなければいけません。わからなくては物語の面白さは伝わらないのですから。

と、再話の方法が説かれている。「いずもの国」の男神が「いなばの国」の女神に求婚しようとかけるところに、話をはじめるので、夫にふさわしい神として、オオクニヌシノミコトが選ばれ閉じられている。

このように再話された「いなばの 白うさぎ」に、「言語文化の伝統」を学習しようとする、まずは聞いた話の内容を整理し、限られた地域の神話としての理解を深めることが求められる。二年生の国語教材としては、その内容を楽しみながら確認することで、神話の読解が果たされたことになろう。

更に留意しておきたいのは、当該の教科書教材の利用が、これだけに終わらないことである。作品名が「いなばの 白うさぎ」と題されていることで、多くの同名他書と読み比べることができる。次節では、その応用に目を向けておく。

三、参考図書 a の「いなばのしろうさぎ」

当該の教科書教材に指導書は、次の二冊を参考図書として紹介している。

- a 舟崎克彦文・赤羽末吉絵「いなばのしろうさぎ」日本の神話 第四巻 あかね書房 一九九五年一〇月。
- b 谷真介文・赤坂三好絵「いなばの白ウサギ」十二支むかしむかしシリーズ 佼成出版 二〇〇六年一〇月。

ここでは、a 書を一覧しておく。表紙絵を見ただけで、うさぎが白くないことに驚かされるはずである。本の中に挟まれた附録には、舟崎克彦が『「しろうさぎ」異聞』と題して、

本書を一瞥された読者の中には、従来の馴染深い『いなばのしろうさぎ』の絵本とは趣を異にする箇所をみつめて、疑問を持たれた向きもあろうかと存じます。

と記す。そのひとつが、茶色いうさぎが描かれている点だとする。それ以前の児童書や絵本のほとんどが「しろうさぎ」を「白うさぎ」と表現することを、固定観念だと批判した。『古事記』には、「素菟」と記されている。本居宣長の『古事記伝』を引用しながら、「あかはだか」と記されたうさぎの毛が白くなるのは冬だが、物語の中でうさぎが寝転ぶ蒲は夏が花期となる。季節を夏に捉えて、うさぎを茶色に表したと説いている。裏面に記される赤羽末吉の「ワニか鮫か」とともに、『古事記』への考察を踏まえ、絵本が制作されているところに大きな特徴が見出される。

中を開くと、「あらくれもので聞こえた／須佐之男の命の子孫にも／こよなく気立てのよい神がいた。／大国主の命という。」と、スサノオノミコト（本文ではすべてカタカナ表記で統一する）から書き起こされていることが留意される。うさぎの登場が終わった後も、オオクニヌシノミコトの苦難を記し、スサノオノミコトのもとに旅立つまでが記されている。

当該の教科書教材に「八十人ものかみさまの兄弟」と記されていた表現は「八十神」と記され、「おひめさま」とあった女神も、「因幡の国の八上姫」と具体名が記されている。国名や神名が漢字で記されるところにも、教科書教材より、高学年を対象とする絵本として構想されている様子がうかがわれる。

a 書は、八十神がオオクニヌシノミコトを馬鹿にすることを記さない。ヤガミヒメ（本文では、カタカナ表記で統一する）を嫁にしようと出かける際、荷物を担がれることが自明であるかのように、「重い足どり」で従っている。当該の教科書教材は、ここになぜ？と問われないように、兄たちにオオクニヌシを「いくじなし」と笑わせていることが考えられる。

八十神が「気多のみさき」にさしかかると、皮をはがれたうさぎに出会う。「二羽」と数えられているところに、高学年の読者が想定される。

八十神が「からかいはんぶん」に声をかける様子は、教科書教材と共通する。ただし、これを「まにうけたうさぎ」とやや批判的に記されている。「塩水がかわくにつれて／ひびわれがはしり／からだがひきちぎられるような／くるしみである。」との表現が、当該の教科書教材より痛々しい。とはいえ、その残酷さは挿絵にまでは反映されていない。遅れてやってきたオオクニヌシノミコトが「おだやかな声でたずねた。」と記されているのも、場面を落ち着いた雰囲気の中に読ませる。

うさぎの言葉遣いには、オオクニヌシノミコトに対して、「ごさいます」と敬語表現が用いられている。「あえぐ息の下からはなしはじめた。」との記述からは、うさぎの様態が悪いことがうかがわれる。そうした中でも、

「かねてから、いつか島を／ぬけだしたいと思いくらしておりましてが／さりとて、よいちえもうかびません／と、あるとき、海のさめたちをたぶらかして／りくへわたってやろうと思いついたのをごさいます。」

と、「たぶらかし」「わたってやろう」との言葉に、うさぎのずる賢さが垣間見える。なによりも、うさぎの相手が、「さめ」と記されていることに驚かされよう。

附録の「ワニか鮫か」に、赤羽末吉は、

この『いなばのしろうさぎ』で、絵描きの関心事はなにより「ワニか「鮫」かということである。

と記す。

ワニは絵になるが、どうもペローとした鮫は絵になりづらい。そういうところからか、この話ではワニを描いたものが多いようである。だが現在の日本の風土を考えてみても、熱帯のワニがいるとは思えない。（以下略）

と述べ、

さんざんあだこうだのあげく出雲にいつて識者にきくと、「あああれはワニ鮫です」と、一言で解決ついた。足をすくわれたような感じであった。（以下略）

とある。この絵本では、わにを敢えて「さめ」と記すことで、読者を立ち止まらせている。当該の教科書教材を聞いた子どもたちが、高学年になり、この本とともに附録を読むと、作者が神話の解釈を試み、絵本にしている様子を知ることができる。

物語に戻ると、うさぎの呼びかけに「なにごとならんと、さめたちは波をざわめかせて」集まってくる。オオクニヌシノミコトには敬意を表し、丁寧な語っていたうさぎが、さめたちには「かずをかぞえてやろう。」と横柄な言葉を遣い差をつけている。

さいごの一尾というところで／わたくしはうれしさのあまり／口走ってしまったのをごさいます。／『やいやい、だまされたな。／わたくしは／海をわたりたかっただけなのさ』

と、調子のよさも表現されている。しかし、「はらをたてたさめ」があつという間に襲いかかると「わたくしの皮をはぎとり……／みるかげもないこのありさま。」と説明をし、「そのうえ」で「八十神さまのおつ

しやることを／しんじたばかりに／いたみはひどくなるばかり、」と、
 たたみかけるように語る。そして、「なすすべもなく／もだえていたと
 ころなのでございます」と嘆いている。

これに『なんとむごいことだ』／大国主はまゆをひそめた。」とあ
 る。「むごいことだ」との表現には、うさぎがさめをだますことから、
 さめが襲いかかってうさぎの皮をはぎとったこと、八十神がうさぎをだ
 ましたこと等を想像することができる。うさぎがサメをだましたことを
 責めないところは、当該の教科書教材と共通する。

うさぎはオオクニヌシノミコトの教えどおりにすると治るのだが、「う
 さぎのからだはみるまに／もとどおりになったのである。」との言葉に
 白さはうかがわれない。そればかりか、うさぎは、

「あなたさまは今でこそ／いやしいもののように／ひとの荷物を／
 背負わされておりますが／八上姫さまを嫁にされるのは／ご兄弟で
 はありません。／あなたさまでござります」

と言い出す。この言葉に呼応するかのように、ヤガミヒメは八十神に、
 「わたくしには／あなたがたのことばは耳に入りませぬ。／大国主
 の命さまのみもとに／嫁ぐつもりです」

と語っている。「大国主の命さまのみもとに／嫁ぐつもりです」との返
 事は、うさぎの言葉が耳に届いていることを示唆しよう。ここにうさぎ
 は、単にさめをだました存在としてだけではなく、八十神にだまされた
 だけの存在としてでもなく、ヤガミヒメの結婚相手を見分け、予言する
 ことを役割としていたことが知られる。

当該の教科書教材とは、うさぎの毛の色が違い、わにが「さめ」と記
 されていた。そればかりではなく、うさぎの役割を改め考えさせる内容
 になっている。

a書の仕掛けはこれだけに終わらない。腹を立てた八十神が、オオク

ニヌシノミコトを騙して、死に追いやつてしまふ。これを助けたのは、
 「母神―刺国若比売」であった。高天の原の「神産巢日の命」の心を動
 かし、「(前略)まえにもまして／りりしいすがたでよみがえると、／力
 みなぎるようすで／あたりをあるきはじめ(後略)」たとある。再び八
 十神に殺されても、母神の「必死の介抱」で息を吹き返す。とはいいえ、
 三度目はなく、母神は黄泉国にスサノオノミコトを訪ねさせる。オオク
 ニヌシノミコトが旅立つところで、物語が閉じられている。

オオクニヌシノミコトを主人公とする点は、当該の教科書教材と内容
 を重ね合わせやすい。a書を読むことで、当該の教科書教材には、話の
 前後があることを知ることができる。こうした内容は、古典作品として
 『古事記』を読む入り口にもなり得る。

四、参考図書bの「いなばの白ウサギ」

ここでは前掲b書を一覧しておく。

題名に「白ウサギ」とあるように、表紙に白いうさぎが掲載されてい
 る。前掲のa書との違いは一目であろう。ページを開いても、

むかし、むかし、因幡の国(鳥取県)の

うみの ちかくに ある 竹林に、

たくさん の ウサギが、すんでいました。

と記され、竹林に遊ぶ多くの白うさぎたちが描かれている。「むかし、
 むかし」とのはじまりは、当該の教科書教材と同様に、昔話の方法を用
 いた、親しみやすい語りはじめになっている。うさぎが白い点も一致し
 ている。地名が漢字で書かれている点では、a書と同様に、教科書教材
 より高学年が対象とされる。干支シリーズの一話になっているためであ
 ろう。うさぎが主人公に捉えられている点が、前掲二書と大きく異なる。

話の内容も、嵐に降り続く雨によって起きた大水に、逃げ遅れたうさぎが流されるといふ独自の展開にはじまる。うさぎが「一わ」と数えられるところは、a書と読者層を同じくしている。川から海へと漂流する「およげない」うさぎの、「しんばい」する様子が、詳細に展開されている。やがて小さな島にたどり着き、「ほつと」しながらも、誰もいないので「さびしく」なり、海に向こうに見える「ふるさと」へ帰ることを希求する。前掲の二書が、単に海を渡りたがるうさぎを記していたのに対して、視点がうさぎの側に置かれたことで、理由を明らかにする展開となつている。帰ることを志向するうさぎが、海を泳いだり、はねたりする魚たちを見て、「大きな さかなの せなか」に「のせてもら」うことを考えつくところも、

「だけど、もし うみに おちたら、たいへんだ。

ぼくは およげないからな」

とつぶやく先に、

ウサギは こまった かおを しましたが、

すぐ あかるい かおに かかりました。

「うん。いいことを おもいついたぞ」

と、肯定的な表現になつている。うさぎがさめに話しかける言葉遣いは、対等な関係が保たれ、さめも、

「それは、おもしろい。わたしの なかまは、よべば

いくらでも くるぞ。わたしの ほうが、おおいさ。

——で、どうやって、くらべるんだい？」

と、親しみを込めて記されている。声をかける相手を「サメ」と記すところはa書と共通している。出版年月の差異を考慮すると、a書の解釈が定着している様子をうかがうことができる。当該の教科書教材には、挿絵と表現との間に、敢えて差異を残すことで、地域に残された言語の

特徴に、注意を促している様子を確認することができる。

b書には、うさぎとさめの間に和やかな会話が続けられる。うさぎの説明にさめたたちも、「につこり わらって」仲間たちを集めている。うさぎは、「ちゃんと かぞえながら、わたっていくからね。よく きていなよ」と、並んださめたたちを「大きなこえで」数えながら渡って行く。しかし、みさきが近づくと「うれしくて、／がまんできなく」なり、「ぴよーんと たかく」飛び上がりながら、「サメどんたち」に、「だれが かずくらべなんか、するものか」と「いいすてて」しまう。これに怒った一番端のさめが、うさぎの皮をはがす展開は、いずれの話にも通底する。「あかはだか」にされたうさぎが、砂浜で痛くて泣くまでの経緯が詳述されている。

神々はここに至つてようやく登場する。通りがかる理由や、旅の目的などは問題にされていない。話の主人公が変わっている様子を確かめることができよう。

うさぎが「くるしみを うったえる」と、旅をして来た「わかい かみさまたち」は、「それなら、いいことを おしえよう。」と塩水で体を洗い、体を渴かすことを告げて去って行く。言われたとおりにしたうさぎが、「ますます いたくなつて、がまんできなくなりました。」と記された後に、

わかい かみさまたちは、ウサギを からかつて、

うそを いったのです。

との説明が加筆されている。ここにも、主人公がうさぎであることを確認することができる。挿絵も神々を描かず、赤裸のうさぎが痛くて転げ回る様子のみを強調する。

ここに「これは、かわいそうな。どうしたんだ？」と声をかけたオオクニヌシノミコトは、「大きな ふくろを かついだ かみさまです。」

と紹介されている。先を歩いて行った神々の弟なのだが、「にいさんたちの にもつを ぜんぶ もたせているので」と、持たされている理由は明らかにされないまま、遅れて歩いていることだけが記される。オオクニヌシノミコトは、さめたちをだましたうさぎの行為に「おまえもわるい。」と罪を明らかにしているところは、当該の教科書教材とも、a書とも異なる。その上で、

「でも、もう じゆうぶん くるしんだのだから、ゆるされていいだろう」

と、「しんせつに、なおしかたを おしえてやりました。」とある。うさぎは「やさしい かみさまに」教えられたとおりにすると「いたみがなくなつて、なん日かすると、毛も、はえてきたのです。」と、元の姿になる様子が記されている。

その後のうさぎは、「大よろこびで」仲間たちのいる竹林に戻る。それだけに終わらず、オオクニヌシノミコトに教えられたことを人間たちに、

ガマのほの かふんは、きずばかりでは なく、ひふびょうや、子どもたちの やまいにも、よく ききます。

と教えたところ。うさぎに感謝した村人たちは、うさぎが死ぬと住んでいた竹林に、

小さな おみやを つくつて、かみさまとしてまつたという はなしです。

と、前掲二書と大きく異なる結論を導き出している。「おみや」には、鳥取県の白兔神社が想起される。

児童文学の中に再話された神話は、題名が同じであっても一様ではない。作者が解釈を加え、視点を移動させながら作品化しているところに、大きな特徴が見出される。

おわりに

小学校の学習指導要領が、国語に「我が国の言語文化」の一つとして掲げる「伝統的な言語文化」の学習は、神話の場合、教材が再話であることが重視される。児童文学として繰り返し再話されてきた作品に、「言語文化」としての「伝統」を見出すことができる。当該の教科書教材もその一つに位置づけられる。

当該の教科書教材は、小学校二年生という対象年齢に合わせて、「一点の曇りもなく明快」に読み聞く再話として準備されていた。子どもたちは、地域に残された神とうさぎの話を楽しむことになる。はじめてのことだから、わかりやすいのがよい。

当該の教科書教材に参考図書を読み比べてみると、作者による解釈や、視点の移動が、個別に加えられている様子を知ることができる。児童文学の中に広がり行く神話世界が存在することを確認した。再話のひとつについては、個性豊かな文章表現を楽しむことができる。

小学校教育で得た物語や言葉への好奇心や探究心は、中学校の国語教育においても、古典作品の読解に結びつくことが期待される。

注

- (1) 原田留美「伝統的な言語文化の差異倭作品の諸相―小学校国語教材「いなばのしろうさぎ」の場合―」『新潟青陵学会誌』第四巻 第一号 二〇一一年九月。「伝統的な言語文化の差異倭作品の諸相2―東京書籍発行小学校国語教科書掲載の「いなばの白うさぎ」について―」『新潟青陵学会誌』第四巻 第一号 二〇一一年九月。川俣沙織「小学校国語教科書における日本神話について」

『中村学園大学発達支援センター研究紀要』第十号 二〇一九年三月。

(2) 原田留美「日本の神話を補助教材として扱う場合の問題点―「いなばのしろうさぎ」の場合―」『新潟青陵学会誌』第三巻第一号 二〇一〇年九月。

(3) 谷本由美「明治期児童向け古事記『いなばのしろうさぎ』のはじまり―チェンバレン『ちりめん本』から巖谷小波『日本昔噺』へ―」『同志社女子大学生生活科学』四十五巻 二〇一二年二月。

(4) 例えば、川端康成訳者代表 世界少年少女文学全集二九 日本編2 「古事記物語」(『日本古典文学集』 創元社 一九五五年二月)の訳者である林房雄は、その「解説」に、

このむずかしいしごとを、今から三十年ほどまえ、わたしがまだ中学生であったころ、鈴木三重吉氏が有名な「古事記物語」を書き上げた。

と評価し、再掲を提案したが、編集部の「すべてを新しく書きおろしたものをのせるといふ方針」に従って書き下ろしたと記している。その五年後に刊行された、浜田廣介訳者代表 少年少女世界文学全集 日本編(1)「古事記」(『古事記 竹取物語 日本民話』講談社 一九六〇年四月)は、巻末に「読書指導」として、小学五年生の感想文を掲載している。絵本では、講談社の絵本ワールド版に「いなばの白うさぎ」(講談社 一九六六年四月)が収められていることをあげておく。

(5) 例えば、松谷みよ子著『決定版 心をそだてる松谷みよ子の日本の神話』講談社 二〇一〇年一〇月(本文は、一九六八年刊行の『日本の神話』(講談社)を基礎としている)。富安陽子文・山村浩二絵・三浦佑之監修『絵物語 古事記』偕成社 二〇一七年一

二月等。

※本稿の着想は、「絵本『いなばの白ウサギ』の謎」『開いてみよう 古典の小箱』(勉強出版刊 二〇〇四年七月)にはじまる。今回は、小学校の国語教育と児童文学の側から、その一部を述べたものである。